Book Preview

富山高校図書館　2022.6

『　臨床の砦　』　夏川 草介【著】

「この戦、負けますね」この一年、誰もまともに休みを取れていないスタッフたちの印象は「医療壊滅」……。当院が拒否すれば、患者に行き場はありません。病院は、異様な雰囲気に包まれていた。命がけでコロナに立ち向かった小さな病院の、知られざる記録。夏川草介氏は、現役の内科医でもあります。コロナ禍の最前線で多くの患者さんと向き合う日々が、一年以上続いています。本書は、著者が 2020 年末から 21 年 2 月にかけて経験したことを克明に綴った、現代版『ペスト』ともいえるドキュメント小説。

『　岩波新書　幕末社会　』　須田 努【著】

徳川体制を支えていた「仁政と武威」の揺らぎ、広がる格差と蔓延する暴力、頻発する天災や疫病…先の見えない時代を、人びとはどのように生きたのか。幕末維新を天保期から始まる長い変動過程としてとらえ、みずから動きだす百姓、自己主張を始める若者、新たな生き方を模索する女性に光をあて、その社会像を総合的に描く。

『　その農地、私が買います　』　高橋 久美子【著】

「おまえは東京におるんじゃけん関係なかろわい」ｂｙ父。農地は負の遺産と考える父親世代、中・小規模農家の経済的な厳しさ、農地を持っている人しか農地を買えない法律、急増する猿や猪の畑荒らし、子孫を残せない「Ｆ１種」の種、体調を悪くする農薬散布、足並みを揃えることを最優先する町の雰囲気…ｅｔｃ．未来に後悔をしないため、まずは知ること、動くこと。「変わり者」と言われても、高橋さん家の次女はゆく！

『　新潮新書　あの戦争は何だったのか　』　保阪 正康【著】

戦後六十年の間、太平洋戦争は様々に語られ、記されてきた。だが、本当にその全体像を明確に捉えたものがあったといえるだろうか――。旧日本軍の構造から説き起こし、どうして戦争を始めなければならなかったのか、引き起こした“真の黒幕”とは誰だったのか、なぜ無謀な戦いを続けざるをえなかったのか、その実態を炙り出す。単純な善悪二元論を排し、「あの戦争」を歴史の中に位置づける唯一無二の試み。

『　決定版　菜根譚　』　守屋 洋【著】

ロングセラー『新釈 菜根譚』の完全版。「菜根譚」は、人生の書である。著者は明の人、洪自誠。人たるの道を説く儒教、のんびり自足する思想を説く道教、悩める心の救済となる禅。この三つの教えが渾然一体となった、不思議な魅力をたたえた古典である。そしてなぜか、「菜根譚」は中国よりも日本で人気が高い。まさに、日本人が心に刻むべき「処世の道」がここにあると言える。